



皆さんはブラジルという国の名前を聞いた時に何を想像されるでしょうか。小気味良いリズムと共に繰り広げられるリオのカーニバル、素朴でどこか懐かしい味のするコーヒー、ワールドカップで見事5回目の優勝に輝いたサッカー、ブラジルの名を世界に知らしめた美しい旋律と共に奏でられるどこか郷愁を感じさせるボサ・ノヴァ、そして、多種多様な生物が息するアマゾン。大航海時代に発見されてから僅か500年余りの歴史の中で築かれたブラジル。しかし、今日のブラジルがあるのも開拓者であるポルトガル人の並ならぬ努力と、その後相次いで入植する移民の苦悩の歴史が存在する事を皆さんはご存知でしょうか。

当時スペインとトルデシヤス条約によって世界を二分すると言う、とてつもない計画を企てるほどの力があつたポルトガルは、ブラジルと出会ってからその運命を大きく変える事となる。それは、数々の自然の恵みと出会う事によって起こる。染料の元である樹木のパウ・ブラジル、砂糖、ミナスジェライスで発見される金、コーヒー、そして19世紀後半から20世紀初頭まで行われたゴム採取。その一つ一つの経済サイクルが流行するたびに、海外から多くの移民者が一攫千金を夢見てブラジルへと乗り込んでいった。そして、その最後の流れであるゴム採取に目を向けた作品が、このフェレイラ・デ・カストロによって書かれた『大密林』である。

ブラジルのゴムブームは世界的にも有名で、1880年代から1900年代にかけての30年間は、欧米の工業発達からゴムの需要が伸び、ゴムで賑わったアマゾン川流域の都市であるマナウスに、巨額の富をもたらした。イタリア産の大理石がふんだんに使われたフランス風のオペラハウスも建造され、ヨーロッパとマナウスを繋ぐ豪華客船も行き来していた。しかし、イギリスがゴムの大量生産

に成功すると、ブラジルのゴムの価格は半額以下に暴落し、アマゾンのゴム産業は大きなダメージを受けた。この本はそんなダメージを受けた後のアマゾンが舞台となっている。



本作品『大密林』は、作者であるポルトガル人のフェレイラ・デ・カストロの、ブラジリアマゾン奥地のマデイラ川沿いのゴム林で、セリンゲイロ（ゴム樹液採取人）として4年にわたり送った植民生活の実体験に基づいて書かれた物である。物語は世界的なゴムブームが去った後の1910年代末から1920年代初頭のアマゾンの地において栽培の為に過酷な自然と闘う人々を中心に展開していく。

この本の素晴らしさは、細部までこだわって描かれていく情景描写にあると思う。まるでアマゾンに生活する動植物の息吹が感じられそうなくらいに情景描写がなされていて、読み進めていく程にその世界に引き込まれていく。これだけアマゾンに細部までリアルに描けるのも、彼の4年にわたるアマゾンでの生活の結果ではなからうか。どのような理由にせよ、そこに住み着き、そしてそこでの経験を活かして、アマゾンの素晴らしさを本を通して伝えていこうという彼の意思が伝わってくる。

実はこういう私もブラジルに4年間にわたり住んでいた。その間に日本と全く違うブラジル独自の文化に触れ、ブラジルに魅せられてしまった一人である。彼らが誇りとするアマゾンへの想いはすさまじい物がある。今でこそ日本や諸外国の企業の進出によって、その気高き大密林のペールが剥がされていこうとしているが、その中に足を踏み入れたときに、人はその小ささに、そして自然の偉大さに心を動かされる。未知の部分を多く秘めた、秘境アマゾンに少しでも興味がある方にこの本を手にとってもらい、アマゾン小旅行を楽しんで頂きたいと思う。

やまだ てっぺい

(ブラジルポルトガル語学科 2年次生)